みちのく七夕殺人事件

斎藤 栄 *Sakae Saitō*

中公文庫

中公文庫

みちのく七夕殺人事件

定価はカバーに表示してあります。

1997年9月3日印刷
1997年9月18日発行

著者 斎藤 栄

発行者 笠松 巌

発行所 中央公論社 〒104 東京都中央区京橋2-8-7 振替 00120-4-34
TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部)

©1997 CHUOKORON-SHA,INC. / Sakae Saito

本文印刷 大日本印刷 カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 大日本印刷
ISBN4-12-202936-8 C1193 Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

みちのく七夕殺人事件

斎藤　栄

中央公論社

目次

第一章　スリ団　7
第二章　殺人　34
第三章　俳句　62
第四章　仙台　89
第五章　謎　115
第六章　紫屋　142
第七章　女　170
第八章　奥の細道　197

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第九章　総理辞任　224
第十章　死　者　251
第十一章　防犯カメラ　278
第十二章　真犯人　306
解説　影山荘一　333

みちのく七夕殺人事件

第一章　スリ団

1

七夕がもうすぐという季節であった。

警察庁鉄道警察特捜隊に属する江戸川匡太郎警部は、部下の尾瀬優一刑事と共に、隊長の井筒警視に呼び出されていた。

このところ、井筒隊長のご機嫌がよろしくないのを、江戸川達はよく知っていたので、〈触らぬ神にたたりなし〉とばかりに、隊長室にはいるときから、頭を低くしていた。いつ、どんな雷が落ちないとも限らないからである。

果して、井筒の前に来てみると、彼は、手に持った愛用の太い万年筆を、指先でく

るくる、くるくると廻している。
このペン廻しは、心の中に、何か大きな動きがあるとき、自然に出てくる井筒の癖なのである。
〈こりゃ、問題だぞ〉
と、江戸川と尾瀬は、互いに目と目で、頷(うなず)き合った。
井筒は、二人の顔を見ると、
「おう。来たか、まあ、そこへ坐れ……」
と、隊長室の三点セットを示した。
江戸川は、
「はい。……いえ、このままで結構です」
と、それを断(ことわ)り、直立不動の姿勢をとり続けた。
「そうか。じゃ、早速、本題にはいろう。例のK国暴力団スリの事件がらみなんだが……」
と、井筒は切り出した。
「やはり、その件ですか……」

江戸川は反射的に言ってしまった。

「うむ。君も知っているように、JR日暮里駅での、拳銃発射事件にしても、とにかく危なくて仕方がない。わが方への投書も多いのは知っての通りだ」

井筒はじっと江戸川達を見詰めながら、続けた。

「先般の取締強化対策で、かなり効果はでていると思っていますが……ほかに何か動きでも？」

江戸川は、あらためて、井筒が話を出すからには、特別のことがあったのだろう、と想像した。

「実はね。K国警察から、このわしのところに、特別に依頼があった。向こうの本国でも、集団暴力スリには、頭を痛めている。取締強化の結果が、日本への出稼(でかせぎ)となったわけだ。しかし、日本での活動が、外電でも大々的に報じられると、K国も面子(メンツ)がなくなる。そこで、向こうから、優秀な刑事を送り込むから、合同捜査をさせてくれ、というわけだよ」

井筒の表情には、渋い色が浮び、眉根が寄った。

「そんな必要はありませんよ。それでは、わが国の……面子というか、これは立つ瀬

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

がありません。特にわが方は……」
江戸川はキッとなって言った。
「その通りさ。わしも、その点はキッパリと言ってやった。ありがたいお申し出だが、こちらにもちゃんと態勢ができており、優秀な刑事が配備されている。ご心配ご無用とね……」
「それでどうしました？」
「いや、向こうは引っ込んだ。が、そうなると、いつまでも、のんびり構えてもいられない。一挙に、K国スリをあげなければ……」
「当然です」
「そこで君達に……いわば特命をくだして、彼等を一人残らず逮捕してもらおうと思っている」
「はい、了解しました」
と、江戸川と尾瀬は同時に答えた。

2

二人の部下の、キッパリした返事に、井筒は満足そうに目を細めたが、そのあと、また右手のペン廻しを、くるくると、二、三度やった。

「……ただし……君達も、よく知っているように、すでに、ＪＲ各線……特に山手線管内では、三十箇所において、四十人の集団スリをつかまえている。そのために、今や、その中心は移動しつつある」

と、隊長は言った。

「それは感じていました」

と、江戸川は言った。

「わしのところで、コンピューター管理しているデーターを分析したところ、その大半の生き残りは、新幹線へ舞台を移しているとわかった」

「はい」

「特に、東北新幹線にはいり込み、七夕（たなばた）の近い仙台あたりに下車しては、駅を中心に

荒しまわっている。これが現状のようだ……」

と、井筒は指摘した。

「それも私にはわかっています。ですから、彼等を根こそぎにするには、その移動先へ出て行かざるをえないわけです」

「君がそうすべきだと思うようにやってほしい。そうして、彼等が凶暴手段に走って、人を傷つけたり、殺したりした場合は、それを中心にチェックしてゆく。いいね？」

「そうします。彼等は、いわゆるヒットアンドアウェー方式ですから、勝負は短い上に、強引です。その強引さを、これまで許していたのは、こちらも甘かったと反省しているんです」

「それほど甘くはないと思うが、相手が相手だから……」

「彼等の使うアンテナも、普通の見張りではなくて、これまでの調べでは、すべて凶器を持っていました」

〈アンテナ〉というのは、見張り役のことだが、K国のスリでは、凶暴な人物が多い。つまり、犯行がバレそうになると、このアンテナが騒ぎを起こし、そっちに刑事の気を集めさせるという役を果すのだ。

「うむ。平気で人を殺す……これは本来のハコ師の手口じゃない。ハコ師は品のいい……テクニシャンと思っていたが、連中はまるきり違う……」

「はい。手段を選ばないやり口ですから、許せません」

と、江戸川は言った。

このとき、ちらっと彼の念頭をかすめたのは、瓜生(うりゅう)美也子と明美の姉妹ハコ師のことであった。

不思議な縁で、追う者、追われる者という相反する立場だが、瓜生姉妹には、好感以上のものを感じていた。彼女達は、人を殺さないどころか、スリの対象は、すべて社会の強者で、金に困っていない人間にしぼっている。

〈それにひきかえ……〉

と、江戸川は思った。

〈K国スリ団は、絶対に許すことができない……〉

「よし。君がそうまで言ってくれるなら、安心してまかせられる。とにかく、充分、用心して、コトに当ってほしい。応援の人数が欲しければ、できる限りのことをする」

と、井筒は言った。

「ありがとうございます。しかし、しばらく向こうの動きを探ってみましょう。そうしませんと、単に敵を用心させ、別の所へ移動してしまいます。安心させておいて、パッと網をかける作戦でゆきます」

「それがいいだろうな。ところで武器はどうする？」

と、井筒が訊いた。

相手は、ナイフや庖丁など、さまざまな武器で、武装しているのだ。

「拳銃は持っていますが、どうせ使えません。私としては、こちらも、サバイバルナイフなど用意はしますが、それよりも、空手で身を守る方がいいと思っています。いざという時には、手足の一本や二本は、へし折るかもしれません」

江戸川は、激しい口調で言った。

「よかろう。正当防衛になるような時なら……」

と、井筒は大きく頷いた。

「尾瀬君。君も隊長に言いたいことがあれば言ってくれないか」

江戸川は尾瀬刑事に訊いた。

「いゃあ……。別にありませんよ。あるとしたら、この重要な……国の名誉をかけた仕事に特命をもらったことに、感謝するくらいのことでしょうか」

尾瀬は笑った。

「ハハハ……江戸川君はいい部下を持っているね」

井筒は、いつの間にか、上機嫌に変って、声高に笑ったのである。

3

隊長室を出た江戸川と尾瀬は、こんな会話を交わした。

「尾瀬君。東北新幹線方面に移動したスリ団は、これまでの捜査から洩れた、最も凶悪なグループらしいよ。K国でも、人を殺して来た者もいるという話だ」

「そのようですね。やり甲斐はあります」

「確かにそうだが危険極まりない……」

「向こうも、死にもの狂いになっているはずだ」

「それはそうですよ。なんとか、ショバを変えて、生き残ろうとしている連中ですか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com